昭和四十七年十月廿二日（日）

（浦生大閤堅固）

第五十二回史跡めぐり資料

越谷市郷土研究会

第五十一回史跡めぐり御案内

コース案内

一、とき　昭和四十七年十月二十二日（土）
　　午前九時三十分

一、集合場所　越谷駅　構内集合
　　蒲生駅　下車

一、見学場所
　1、普賢供養塔　ぎょうだいさま
　　考古資料　越谷市蒲生一丁目路傍
　2、清厳院　山門の左甚五郎の竜
　3、藤助河岸　蒲生久伊豆神社

一、解散　バスにて
　　蒲生駅 ―― 越谷駅

一、会費　一五〇円（交通費その他）

※　昼食相参のこと。

主催　越谷市郷土研究会

目次

一、蒲生村　新編武蔵風土記稿一六八頁
　1、昔の蒲生村概観……二頁
　2、高札場　小名　神社仏閣
二、3、復善者に兵役……三頁
　　出国（一）（二）同じ
二、大間野村……三頁
三、清厳院山門の左甚五郎の竜……四頁
四、砂利供養塔「ぎょうだいさま」……五頁
　1、古跡と伝説より
　2、文化財第二集より
五、藤助河岸……六頁

蒲生村

蒲生村は江戸より五里の行程なり。家数二百十七、東西十五町半、南北二十一町餘、四隣東は伊原村西は大宿駅村、北は亟曽根村、南は新綾瀬川を隔てゝ足立郡金石橋門新田なり、用水は駒村及亟曽根村の溜井より引用ゆ、郡八国の後御料所なりしが、慶長年中村内を二分して、東の方を松平伊豆守に賜はり、其後天和年中堀田備中守に替え賜ひしが、元禄の頃より御料所となれり、西分は固より御料なれば、今は村内一圓に御料の地となれり、検地は慶永四年伊奈半十郎東分を糺し、西分は元禄十年酒井河内守改めり、其後享保十二年野村彦右衛門、川西吉次郎等一村の検地ありしと云、当所は日光道中の往還あり、南の方足立郡金石往門新田より北の方足曽根村に連せり。

高札場　村の東にあり

小名　下茶屋　ここに一里塚あり、路上に杉樹を植え、傍に愛宕社あり

上茶屋・奉行地・道沼・西・東

古綾瀬川　川幅二間程　○　新綾瀬川　村の西南を流る　川幅一二間より十四五間に至る。川に添いて堤あり。

土橋　三ヶ所　一は新綾瀬川に架す。長さ十一間。一は長さ六間、悪水溝に架せり。

久伊豆神社　三宇、一は光明院持にて村の鎮守なり、永年中の鎮座なり、一は清蔵院持。一は村民の持なり。

○神明社　清蔵院持也　下二社同じ　末社　牛頭天王、熊野三社権現。　疱瘡神、　稲荷、○　天神社　稲荷社

○山王社　地蔵院の持下同じ　荒神社

○八幡社　光明院の持ち、　第六天社　村の持ち。

清蔵院　新義真言宗、足立郡原村密蔵院末、慈眼山と号す。本尊は十一面観音也、開山月祝、寛永年を伝えず、中興尚永智、明暦四年三月二十一日寂す。

表門　龍神子獅の彫ものあり、吉色に見ゆ。左甚五郎彫りしものなりと云ふ。

鐘楼　鐘は元文四年の銘あり。　閻魔堂　弁天堂

○光明院（同宗別府村慈眼寺末）　開山照山と号す。本尊弥陀、開山永禄、寛永年を伝えず。古は庵室なりしが、この間弘治二年に興立すと云えり。

○地蔵院　同末。摩尼山と号す。中興智淵、寛保十年示寂

地蔵堂　二宇　一は六角堂にて六地蔵を置けり。

復善者　仁兵衛

今村の名主を勤むるに兵衛なる者の善保父にして寛永元年十一月六日死す。此者寛保中洪水の時、多くの人民を救ひしにより、伊奈半左衛門公へ聞え上げ、白銀三枚を賜ふ。其先祖の所持せしものとて鎗一筋、短刀一腰、時田国宗の銘あり、長さ二尺三寸餘、寛保十年本阿弥の極あり、以上の三品を藏すと。

◎大間野村（と左衛門村枝郷　附村添新田）

大間野村も七左衛門村の分村にて、凡そ前村に同じ。江戸より行程五里、家数凡そ五十四、東は蒲生村、南は新綾瀬川を隔て、足立郡長右衛門新田、西北は七左衛門村なり、東西十一町、南北七丁許、用水は前に同じ、分村の後寛文四年より土屋但馬守領分なりしが、天和二年よりて御料所となり、今も然り、検地は元禄十年、酒井河内守乱す。此餘村添の新田は寛保十八年　鷹橋忠守改む。

高札場　村の中程にあり。

古綾瀬川　村の南を流る川巾六間許り

新綾瀬川　村の南界にて川巾十三間新、いつの頃にや堀割にて二条となし、今此川を足立郡の界とす。

とす。されど対岸にも当村の地少しく残れりといふ。

久伊豆社　村の鎮守とす。光福寺持下同じ。

○　稲荷社　正光院の持。

○　弁天社

○　天神社　越ヶ谷宿海寺持

○　光福寺　新義真言宗別府村慈眼寺末、夏堂山と号す。開山善頂、寛永十八年示寂。本尊阿弥陀如来を安ず。

弁天社　○　婆魔堂　村民の持。

○　正光院　浄土宗、足立郡赤山長源寺末、開山を智祭と云、本尊阿弥陀を安ぜり。

以上　新編武蔵風土記稿による。

清藏院山門の左甚五郎の竜

＝越谷市の史跡と伝説＝

大字蒲生国道沿いに所在する。真言宗智山派清藏院は、今から四百三十五年前、天文三年三月。入皇後奈良天皇代、足利将軍十二代、義晴の時代に創建されたものである。

寺院そのものについては詳らかでないが、この寺に民間伝説として伝えられている彫刻師と奇怪な話がある。それは寛永年間、徳川家康の御所日光東照宮の造営について、飛騨の国の番匠たちが、将軍家の命に依り召集され、その技を施したと言われ、その往復の途次、たまたま飛騨の番匠が当山に一夜の宿を乞いに来た。その請に住職は心よく応じ厚遇した。

その厚遇に番匠は衷心より感謝して何等かの謝意を表し度いと申し出で、一夜の内に素材を用いて竜頭の彫り上げた。それを山門の額として掲げ、翌朝自分の技を誇示することもなく帰って行った。

ところが、その後附近の農作物を荒す輩が出ると云う噂が伝わり広って、誰の仕業かと村人が種々相談し論議した結果、この仕業は人間の仕業ではない、何か怪物のなせる業だと云うことになり、その正体を見んものと毎夜毎夜不寝番で見廻り役を定めて見張りをさせた。ところが怪なりや、お寺の山門の竜が夜な夜な額から抜け出して荒し廻っていることがわかった。

そこで村惣代が住職に山門の竜が出ないようにして呉れと頼み込んで来たので、住職は村人に命じて竜の眼に釘を打ちこんで両眼をつぶさせた。そこで村人達はこれによって夜も安心して寝られると思ったところ今度は田圃の中に四斗樽位の跡をつけて、作物を荒しまわり、以前にもまして村人たちは困り抜いた。

そこで困惑の結果、彼の竜を金網で囲をしたところその凶気は止んだと云われている。彼の山門の竜は、村人たちの中には現在でも、史談、説話などで有名な左甚五郎の作と伝えられている。

同寺の山門に古色蒼然として掲げられているが、その眞贋の程は詳らかでない。

学理的な説では、彫刻そのものの出来ばえは確かなものとされている。左甚五郎と云う名匠は史実としては残っていない。あれこれと推考するに左甚五郎は飛騨の国の番匠の代名詞的なもので、当時彼の地には技術の優れた建築家、彫刻家等が居た事は事実である

らしいところからみると、狂奴な行為等は別として、日光東照宮造営の途次の一夜の宿は妥当な事と認められる。

何れ神秘を生むに至った事は、当時の信仰の流れに便乗して生まれた事であろうと思う。現在悪のない民間伝説は、単調な社会生活の中の話題として永久に残しておいた方がいい気がするので、この辺で探索を終ることとする。

史跡と伝説より　自一二一頁　至一二三頁

砂利供養塔

交通安全　道路のうつりかわり

「きょうだいさま」　宝暦と年の道路工事は大がかりのものであった」

神明町の旧道に面した傍に約二百年前に道路工事を行ったと云う証で」　石碑が建っている。

年号　宝暦と年

内容　時近の当時の名主名

遠くは、杉戸、幸手、南は八条、流水山に至るまで乗っている。

文面の内容

「従此北通り、長さ三百間之場所常州坂城郡神山勝秀」　裏面には「此内拾間之場所、野州芳賀郡谷長後嗣附」

尚見のがせない事は「関東地方に大洪水があった」と記録されている。

砂利供養塔に今もつづけられている行事

一、形状　鬼の様な姿のような形の石」なので土地の人々は「おがまさま」とか「行者さま」と云っている。

二、風　風の災にわらじがあげられている。

此わけをいろいろたずねて見たら「行者様もおがま様共に足に関係していて、足を丈夫にするとか、足の病をなおす意味をもっていると云う事が判った。凡らく当時の事ではあるし、砂利その他のものを運ぶにしても足に関係深い事から、又塔そのものも砂利を踏むと云う信仰的なことが関連して建立されたのであろうと思う。

通称「きょうだいさま」　と言われるわけは（この行者の意味からでていることも考えられる。

越谷市の文化財　第二集　文化財調査報告書　一九七二年版　越谷市教育委員会発行によれば次のような事がかゝれている。

次頁　参照

考古資料

普請供養塔

二二頁所載

「ぎょうだいさま」

所在地　越谷市蒲生一丁目

高さ　二五〇cm

巾　五〇cm

厚さ　五〇cm

の供養塔は、享保と年（一七五七）に大規模な道路工事が行われた時に建立されたもので、当時の名主たちの名前が彫まれている。

特殊型の彫刻である。この石塔は「鶴か亀」のような形の石で「おがまさま」或は「ぎょうだいさま」と呼ばれ、周には、わらじなどがあげられており、足を丈夫にすると共に、足の病気をなおし、安全に利をふんで行けることを念ずるもので、道路に魂の存在を信じ、村人及び旅人の安全保証の念願をこめたものである。

越谷市の文化財第二集より。

史跡

藤助河岸

二三頁

所在地　越谷市蒲生

藤助河岸は越谷と草加を境とする綾瀬川の川岸・旧奥州街道側にある。

この河岸を経営して来た商人が藤助を世襲してきたことから「藤助河岸」とよばれ、江戸初期から大正末期まで三百年余の間、綾瀬川舟運の荷物積下ろしの要所であった。

藤助河岸の開祖と言われる「長道ヲ安信士」なる人の没年が、寛和元年（一六八二）であるから藤助河岸が現地に設置されたのは、元禄の綾瀬流路改修の時と言えよう。

この河岸は年貢米はもとより、蒲生、新田を主とした物産を積荷し、江戸から日用品、竹、木材等、なんでも荷揚げしていた。

倉庫は、伝馬茶屋や問屋など四〇せきも、あったという。

越谷市の文化財第二集より。